

【使徒書日課】使徒言行録 24章10～21節

¹⁰総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。¹¹確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっておりません。¹²神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見た者はおられません。¹³そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。¹⁴しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。¹⁵更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。¹⁶こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。¹⁷さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。¹⁸私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。¹⁹ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。²⁰さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。²¹彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章19～36節

¹⁹そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言っておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。²⁴はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移

っている。²⁵はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。²⁶父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。³⁰わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

³¹「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。³²わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。³³あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。³⁴わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言うておく。³⁵ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。³⁶しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。」

この道に従って…【こども説教のために】

日曜日の朝、十字架の掲げられた教会に集められて来るわたしたちは、主イエスの行かれた「道」に従って行こうとしています。教会は、主イエスの「道」に従う者の「道場」なのです。同じように、教会は、二千年間、主イエスの行かれた「道」に従って行こうとする者の集められるところとして続いてきました。そのように教会に集められた者たちのことを、周囲の人々は、「キリスト者（クリスティアノス）」（使徒 11:26）と呼ぶようになったと言います。教会の人々が、自分たちの従うお方を「キリスト」と呼んでいたからです。けれども、その呼び名が定着する前、最初の弟子たちのことは、「ナザレ人の分派」（同 24:5）＝「ナザレ派」と呼ばれたりもしていました。主イエスが「ナザレ」出身の「ナザレ人」だったからです。

主イエスが弟子たちにお示しく下さったのは、天の御父のお示しく下さった生き方です。主イエスは、ご自分が語る言葉は御父の御言葉、ご自分が行うのは神の御業、とおっしゃったのです。それは、「神の子」として生きる「道」です。「神の子」として生きられた主イエスを敬い、自分も「神の子」として生きる道に従うようにと、お教えになられたのです。それは、わたしたちが互いを「神の子」として敬うようになる道でもあるのです。

神に対しても人に対しても

今日投票が行われている選挙で、「ひとり街宣」が話題になっていました。特定の候補者の運動に参加するというのではなく、一人で小さなプラカードをもって駅頭などに立ち、選挙に関する呼びかけをするというのです。特定の組織や団体に属さずに活動するというのは、勇気のいることなのでしょうが、そのような仕方のほうが今は好まれるのかもしれませんが。

わたしたちは、同じ信仰に生きる者同士であっても、政治に期待することも違えば、関り方も異なる者たちです。教会で政治の議論を始めたら、たちまち紛糾するでしょう。かつて、わたしたちの属する日本基督教団は、それによって教団中を巻き込んだ紛争に陥り、長い混迷の時期を歩きました。今でも、その傷が完全に癒えたとは言えないでしょう。古傷に触れることは注意深く避けられ、政治的な立場を明らかにするようなことは厳に慎まれています。そうだとすると、わたしたちが信仰者として政治から距離を置き、関心を持つべきではない、としているわけではありません。むしろ、わたしたちは、「聖書」の教えるところによって、各自が「ひとり」の世に生きる者として考え、行動することを求められている、と考えるべきでしょう。「聖書」の信仰者らは、何よりも世の政治で行われていることを通して、自分たちの信仰のあり方、そして生き方を、自ら問うてきたのです。

初代教会の歩みを伝える「使徒言行録」は、彼ら弟子たちが世の政治に対してどのような向き合い方をしていたのかを知る手がかりを与えてくれます。

ローマ帝国のユダヤ属州を治める総督フェリクスの前に立たされたパウロは、総督に対して最大限の敬意を示そうとしているようです。もちろんそれは、自分を裁く権限のある総督のつかさどる裁判が公正であることを期待しているからでもあるでしょう。しかし、どのような絶大な権力を保持する者であっても、政治的な裁きが公正でなければ、人々から信頼されることはないので。そして、同時に、どのような信頼の置ける人物であっても、それが一人の人の行うことであるかぎりにおいて、絶対的に公正であり続けることは不可能でしょう。人は、いずれ権力の座から退かなければならないからです。

そうであればこそ、パウロは、総督に示して見せることがあるのです。それは、神の裁きです。「正しい者も正しくない者も」等しく裁きの座に立たせ、一人ひとりの為してきたすべてのことを明らかにさし、公明正大な裁きを為さり得るお方、神の裁きです。パウロは、自分が「ナザレ人の分派」と呼ばれる者の道に従いながら**先祖の神を礼拝**し、また「聖書」を信じているのは、そのような裁きをなされるお方の前で、そのお方に対しても、また人に対しても、責められることのない生き方をしたいからだと言うのです。

父から子へ

かつて青年時代、わたしは、どちらかという先輩たちのしてきたことに批判的な考え方をする傾向がありました。教会でも、子どものときから我が物顔で出入りしていたのを良いことに、大先輩を前にして、古い因襲めいたことを批判するようなことを平気でしていました。自分の親世代、あるいはもっと上の世代の先輩たちは、そんなわたしの発言を黙って聞いてくれましたが、あるとき、一人の先輩が、青年たちの集まりの中で、こう言われたのです、「キリスト教というのは、本質的に保守的なものだよ」と。そのときには何のことも分かりませんでした。いつも暴走気味の発言をしていたわたしは、それ以来、発言にブレーキが掛かるようになりました。立ちどまって、あの先輩の言葉を繰り返し考えるようになったのです。

パウロは、総督の前で言います、「私は、…先祖の神を礼拝しているのです」、「この希望は、この人たち自身も同じように抱いております」と。自分が信じ、従っている道は、何か新しいことを始めようとするものではない。親や先輩から教えられたこと、先祖から受け継ぎ、皆が同じようにしていること。これを本当に突き詰めたならば、この道にたどり着く。弟子たちが従っている道、主イエスが行かれた道とは、この道に他ならない。それが、パウロの言わんとしていることだったのでしょ。

主イエスは、弟子たちに何か新しいことを教えられたわけではありませんでした。ユダヤ人として幼いときから聞いてきた「聖書」、「律法と預言者の書」を通して示される神の教え、神の為さる方に、本当に誠実に従うことをお教えになられたのです。「子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなされることはなんでも、子もその通りにする」のです。

父から子へ。主イエスが御父と呼ばれた神の前に進み出るときに「子」として立たれたということ、わたしたちは、麗しい父子愛を見るために聞くではありません。主イエスは、わたしたちの負っていること、与えられていること、賜っていることに、わたしたちの目を向けさせるのです。先達から受け、使徒たちから受け、それゆえに主イエスから受けたことは、主イエスもお受けになられたことでした。主イエスも先達からお受けになりました。そして、究極的には、神からお受けになられたのです。それがすべてです。

それは、正しい者だけが受けたわけではありません。すべての者が、受けました。神から受けました。そうであればこそ、神は、正しい者も正しくない者も、ご自分の前に立たせられるのです。受けたものをどうしたか、問われるのです。次に受け渡したか、問われるのです。そこにこそ、すべて受けたものによって生きてきたわたしたちの生涯の意味が見出されるからです。そこにこそ、永遠の命に至る道があるからです。